
ぱすてるチャイムContinue After Story

ケイ・アイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱすてるチャイムContinue After Story

【Nコード】

N6691X

【作者名】

ケイ・アイク

【あらすじ】

恋人である薙原ユウキが冒険に旅立つてから二年、セレス・ルーブランは光綾学園で教師を続けていた。

そんな時、セレスに衝撃の知らせを耳にする。

薙原ユウキが指名手配された。

事の真相を確かめるため、セレスは数年ぶりの冒険へと旅立つ。

オープニング（前書き）

ばすチャCのその後です。

ユウキ×セレスのカップルとなります。

それに嫌悪感を抱かれる方は、引き返してください。

オープニング

ここは二つの大きな大陸が存在する世界。

一つはルーベンス大陸。もう一つはコルウェイド大陸。

その二つの大陸の間には、ライの海と呼ばれる大海が隔てている。

そして、この物語はコルウェイドにいる一人の少年から始まる…。

*

コルウェイドの山中で、一人の少年少女が走っていた。

「はあ、はあ…」

一人の二十歳近くの少年が息を荒くしながら走っている。

そんな少年の前を走っていた少女が立ち止まって、少年のほうに振り返る。

「大丈夫ですか…?」

「ああ、何とか…。すまないな、助けてもらって…」

「いえ、偶々ですから…」

少年の言葉に少女はそう答える。

「これから如何するのです? あなたは今、世界で敵と見なされていますよ…」

少女は少年にそう言った。

「そうだな…」

少年は何か考え込むようにそう言った。

*

場所は変わって、ここはルーベンス大陸。

六つの大国があり、その内の一つであるラスタル。そこにある冒険者学校の一つ、光綾学園。

「もぐもぐ…、ずずず…」

一人の女性が部屋で肉まんとお茶を飲み、テレビをつけながら寛いでいる。

彼女の名はセレス・ループラン。光綾学園のスカウト教師である。今日の勤務を終え、一息つくセレス。

「ふう…、もうこんな時間ですか」

ふと壁に掛かっている時計を見ると、もう時刻は日が変わろうとしている。

「あら…」

セレスは時計の下に掛かっているカレンダーに目を向ける。

「もう…、あれから二年経ったんですね…」

二年前、セレスは当時三年生だった一人の男の子に告白された。
男の子の名は、薙原ユウキ。

ユウキはダンジョン実習の時、仲間を誰も誘わず、ずっと一人で
行っていた。

それを心配したセレスは、仲間の大切さを教えるため、ユウキと
一緒にダンジョンへと潜った。

そこでユウキは、勝手に単独行動をとり、モンスターの群れに襲
われて怪我を負ったのだ。

それをセレスに指摘され、ユウキは自分の間違いに気づいたのだ。
ユウキはそれを教えてくれたセレスに恋をした。そして聖誕祭の
日に、ユウキに告白された。

「薙原くん…、今頃どうしているのでしょうか…」

心配そうな顔でセレスは言う。

冒険に出る時と帰る時には、連絡は必ず入れてくれた。
それが最近、連絡がないのである。

「……」

ユウキに大好きな肉まんをご馳走してくれた事。

キーホルダーをプレゼントしてくれた事。

セレスにとって、ユウキのしてくれた事はとても嬉しい事ばかり
である。

その中で一番嬉しいのは、ユウキから告白された事である。

ユウキからの告白で、セレスはユウキの事を好きになったのだか
ら。

「あ、いけない。もうそろそろ休まないと…」

そう言って、セレスはテレビを消そうとするが、

『ここで、緊急のニュースをお知らせします』

ニュースの声を聞き、セレスは消そうとするのを思い止まる。

『今日、一人の冒険者が、全国に指名手配されることになりました』

普段ならば聞き流す程度であつただろう。次の言葉を聞かなければ。

『その冒険者の名は、薙原ユウキ』

セレスの頭は、真っ白になった。

「…え？」

『その冒険者はコルウェイドで—』

セレスの耳には、その先の内容は耳に入っていなかった。

「薙原…くん…」

今ここに、運命の齒車が回り始めた…。
世界を舞台にした物語の齒車が…。

オープニング（後書き）

短くなりました…。今後もおそらくこの程度の短さかと…。
それでもよろしければ、どうかよろしくお願いします。

一話目

「……」

セレスは重い足取りで廊下を歩いていった。

理由は言うまでもなく、ユウキが指名手配を受けた事だ。

その知らせを聞いてからこの一ヶ月の間、余りの衝撃にセレスは教師の勤めが覚束おぼつかなくなっていた。

「はぁ……」

重苦しいため息を吐いて、セレスは一つの部屋の前に立ち止まる。

その部屋は光綾学園の園長室。

セレスは学園長に呼び出されたのだ。

コンコンッ

力無い手で園長室のドアをノックするセレス。

「誰ですか？」

ノックの後に園長室から聞こえた声にセレスは答える。

「…セレスです」

「入りなさい」

か細い声のセレスに入るように言われ、セレスは園長室に入る。

「……」

一声も出す気力がない程セレスは暗い表情だった。
そんなセレスに学園長、ベネット・コジュールが声をかける。

「セレス先生」

「……」

「ここ最近元気がありませんが、何かあったのですか？」
「……」

ベネットの言葉に返答しないセレスを見て、ベネットはため息を吐く。

「薙原くんの事でしょう？」

ベネットの言葉にセレスは驚く。

「ど、どうして……」

「言われなくともわかります。あなたの事を何も見なかったと思ってましたか？」

驚いているセレスにベネットは言葉を続ける。

「コルウェイドのギルドにいる冒険者から連絡がありました。薙原くんはコルウェイドで冒険をしていたそうです」

「……」

「それがある時、コルウェイドにあった一つの村が滅ぼされたのです。今ニュースでも、その話題で持ちきりです」

そうベネットは言ったが、セレスはユウキの事で何も知らなかった。

その話とユウキに何の関係しているのか、セレスはベネットに聞いた。

「…それが薙原くんと何の関係が？」

「生き残った村人からそういう話を聞いたそうです。一人の見知らぬ少年がそう名乗ったと…」

そう言うベネットも辛い表情であった。

自分の学園の卒業生がそんな事するはずがないと思いつつも、この話題を切り出すのは辛いものがある。

だが、それ以上に辛いのはセレスの方だ。

自分の恋人がこんな事になってしまったのだから。

「……」

「セレス先生」

落ち込むセレスに、ベネットは言った。

「薙原くんを探しに行きなさい」

「…え？」

何を言われたのか分からなかった。

セレスはそんな表情だ。

「薙原くんの事…、好きなのでしょう？」

その言葉にセレスは顔を赤くした。

「え！？えっ…、ど、どうして…？」

「そのくらい分かります。二年前から薙原くんに好意を持っていた

のでしょうか？それに、薙原くんも…」

「は、はっ…」

ベネットの言葉にセレスは何も言えず、ますます顔を赤くした。

「それに、協力者もこちらに来るように言っておきました」

「え？」

ベネットの言葉の意味が分からず、セレスが首を傾げた時、

コンコンッ

「ベネット先生」

入り口のドアがノックされ、その向こうから声がした。

（え…、この声…）

聞こえた声はセレスにとって聞き覚えのある声だ。

「来ましたね。入りなさい」

「はい、失礼します」

ベネットがそう言い、ドアが開かれると、三人の女の子が入ってくる。

「あ…！」

セレスはその女の子達の姿を見て驚いた。

「お久しぶりです、セレス先生、園長先生」

メガネをかけた女の子がセレスとベネットにお辞儀をして挨拶すると、

「お久しぶりです！」

「お久しぶりです。二年ぶりですね」

紫色のツインテールの女の子が元気な声で挨拶して、続いて猫耳のアクセサリーとリボンをつけた女の子が挨拶した。

「お久しぶりです、シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん。三人とも、元気そうだなによりです」

先程の特徴の順に、

シルビア・コール

フィル・イハート

鈴木ぼたん

三人とも光綾学園の卒業生であり、セレスのクラスの生徒だった。

「シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん、本当にお久しぶりです。でも、どうして…」

二年ぶりの再会に喜ぶセレスだが、何故三人がここにいるのかわからなかった。

そんなセレスに、ベネットが答えた。

「私が頼んだのです。薙原くんの事に、セレス先生と協力してほしいと」

「ベネット先生…」

ベネットはセレスの知らないところで色々としてくれたのである。

「セレス先生、いえ、セレス・ループラン。あなたはこれより冒険者として彼女らと共に行きなさい」

「あ……」

セレスの心を汲み取り、色々と準備をしてくれた。

そんなベネットに、セレスは涙を堪えながらも、はっきりと答えた。

「……はいっ!!」

そう答えたセレスの顔には、さっきまでの暗さはなかった。

これより冒険が始まる。

セレスにとつての、数年ぶりの冒険が。

恋人探しの冒険が。

だが、これが世界の命運をかけた大きな戦いの幕開けになるとは、誰も予想すらしなかった。

一話目（後書き）

ばすてるチャイムContinue本編じゃあ一部しか出てこなかったセレス。

なら、その後の話で冒険に出しちゃえという妄想で作った話です。
では、次回にあいましょう。

二話目

ザザーン…

海の波が音をたてながら、ルーベンスからの船がコルウェイドへ向かって進んでいる。

その船にはセレス達が乗っていた。

ベネットはこの日に船が来る事も計算して、あの日にセレスを呼び出したのだ。

（コルウェイド…）

セレスはコルウェイドに渡った事はあるが、それは数年前までの話だ。

今コルウェイドがどうなっているのか、それはセレスには分からない。

それよりも実力のほうだ。

数年前から冒険を捨てて教師となった。

冒険者学校の教師とはいえ、腕が落ちたかもしれない。

もつとも、それはもう本人は分かりきってる事なのだが。

「あ、先生」

そんな時、フィルとぼたんがセレスのところにやってきた。

「海を眺めていたんですか？」

「ええ、とても綺麗な海ですから、ずっと見ていたくなります」

そう言うセレスの視界には、一面太陽の光を浴びてキラキラ輝い

ている海面が映っている。

「それで二人とも、卒業してからどう過ごしてました？」

セレスはフィルとぼたんに卒業後はどうしていたのかを訊ねた。

「私はルーベンスに残っていました。向こうでは同人活動はなかったので、コルウェイドへ行くのは今回が初めてです」

ぼたんが淡々と話し、続いてフィルが続く。

「ボクはユウキについて行って、コルウェイドのギルドで働いてたんだ。けど…」

そこでフィルの声が暗くなった。

「そんなある時なんだ…、今回の事件がでてきたのは…」
「あ…」

フィルの言葉にセレスは暗い表情になる。

「新大陸に行つてからのユウキは凄かったよ…。ボクと一緒にギルドに入ったのに、凄い勢いでどんどん仕事をこなして、ギルドに所属してから一年くらいかな…。別のギルドで新しく入った人達の指導を頼まれたんだ。ボクも一緒に行きたかったけど、ボクは呼ばれなかったから…」

フィルはユウキについていったものの、ギルドからの指令で離れてしまったのである。

「それからだよ…。ユウキが指名手配されたって聞いたの…」
「…そうでしたか」

フィルの話を聞き、ますます暗くなるセレス。

「けど、ボクはこんな話信じない！！ユウキが指名手配なんて、何かの間違いに決まってる！ボクは絶対にそれを証明するんだ！」

「フィルさん…、そうですね。落ち込んではいけませんね！」

そういうフィルの決意に、セレスも明るくはつきりと言った。

「みんな、そろそろコルウェイドに着くわ」

そんな時に、船内にいたシルビアがセレス達のところにやってきた。

「はい。あの…、シルビアさん、フィルさん、ぼたんさん、今回は本当にありがとうございます。一緒についてきてくれて、とても心強いです」

セレスはシルビア達に感謝の言葉を言った。
そんなセレスにぼたんが言う。

「いえ、ベネット先生からの頼みですし、今回私にとって、コルウェイドに行くのは都合が良かったので…」

「えっと、ぼたんさん？都合が良いというのは…」

「さつき新大陸に同人が無いと言いましたが、その同人を新大陸に広めたいとか考えてたんです。そういう意味では、今回の話は私のためでもあるのです」

「そうですね。良い目標ですね」

「うん、ボクも応援してるからね」

「ありがとう、セレス先生、フィル」

エールを送ってくれたセレスとフィルに礼を言うぼたん。

「それで、シルビアさんはどうして新大陸へ行こうと思ったんです？」

セレスは次に、シルビアにそう訊ねた。

「ベネット先生から頼まれたというのがありますが、実家の都合が一段落ついたので…」

「実家のご都合ですか？」

「実は、母がお世話になっている病院の先生と再婚する事になったんです。それで新大陸に行けるかもしれないと思った時に、今回の話が来たので…」

「そうなのですか！シルビアさん、おめでとうございます！！」

「おめでとう、シルビア！！」

「あ、ありがとうございます…」

セレス達の言葉に照れながらも、お礼を言うシルビア。

「みんな、港町が見えてきたわ」

ぼたんがそう言い、セレス達も港町がある方に目を向ける。
コルウェイドでの、最初の冒険の舞台となる港町に。

*

オーシャの港町。

ルーベンスからコルウェイドにやってくるには、必ずここに船が来る。

人が沢山いて活気がある場所である。

セレス達は船から降り、港の広いところへと歩を進める。

「ふふっ…、懐かしいです。この町の活気だけは、時間が経っても変わりませんね」

数年ぶりの冒険に、セレスは心躍っている。

「先生もコルウェイドで冒険したの？」

「もちろん。あの時も初めての新大陸にドキドキしてましたから」

フィルの言葉にセレスはそう答えた。

（ただ…、今回の薙原くんの事で来るなんて思ってもいませんでした…）

皮肉にも、ユウキの指名手配の真相探しで来る事になった今回の冒険。

悲しく思いながらも、セレスは言葉にはせず心の中でそう吐いた。

「それで、フィルさん。ここに迎えの人が来るって聞いたけど…」

「うん、ここに来る事になってるけど…」

そんな時だった。

「フィルーッ！」

フィルの名前を呼ぶ、聞き覚えのある少女の声が聞こえた。

茶色のツインテールの少女がこちらにやってくる。

「あ、リナ！」

フィルが少女のほうを向いて手を振る。

「久しぶり、フィル！」

「うん、リナも久しぶり！」

少女の名は、竜胆リナ。

光綾学園出身の冒険者であり、フィル達と同じクラスメート。
そして、薙原ユウキの幼なじみである。

「セレス先生、お久しぶりです。ぼたん、委員長も久しぶり」

「竜胆さん、お久しぶりです」

「リナも、久しぶりね」

「竜胆さん…、もう私は委員長じゃないのに…」

「ご、ごめん。つい学園での呼び方で呼んじゃって…」

名前で呼んでくれなかった事にシルビアが不満を言い、謝るリナ。

「迎えの人って、竜胆さんの事だったんですね」

「はい、ベネット先生から、セレス先生達が来るってお聞きしましたので」

リナは言葉を続ける。

「セレス先生、本当にありがとうございます。今回の事は、正直シ
ョックでしたので…」

「…薙原君の事ですね…」

言いづらくしても、そう言葉にするセレス。

「ええ、まさかユウキがこんな事になるなんて、夢にも思ってたせんでしたから…」

「…」

幼なじみに起こった事にショックであるリナ。
リナの言葉にセレス達は黙ってしまう。

「でも、私はユウキがこんな事をするなんて思ってません！何としても、間違いだって証明したいんです！！」

「竜胆さん…」

リナの奮い立たせるような言葉に、セレス達も笑顔に答える。

「そうですね、今は落ち込んでる場合じゃありません。そのために私達は前に進んで行かないと」

「はい、先生！」

「ボク達でユウキを助けるぞーっ！！」

自分に、そして教え子達にも元気付けるように、セレスはそう言った。

そんなセレスにリナ達も頷く。

「それでは、ギルドのほうに案内します」

「はい、よろしく願います」

そう言って、セレス達はリナの後をついていく。
新大陸での、冒険の第一歩が始まる。

二話目（後書き）

言い忘れてましたが、わたしは前作のほうはプレイしていませんので、前作のことについては何も知りません。もしかしたらこれからの話でも何か違うところが出てくるかもしれませんが、その時はご意見があればお願いします。

三話目

リナのご案内で、セレス達はギルドへとやってきた。

「ただいま戻りました！」

ギルドのドアを開け、リナは帰りの報告をする。

「帰ってきたね、待っていたよ！」

ギルドに入ると、そのカウンターに一人の男が立っている。
おそらくこのギルド長なのだろう。

ギルド長はセレス達を見て言った。

「このギルド長のミッシェルといいます。リナ君から話は聞いて
いるよ。君達が協力者なんだね？」

「あ、はい。セレス・ルーブランです」

「シルビア・コールといいます」

「鈴木ぼたんです」

ギルド長の言葉にセレス達は自己紹介をする。

「そういえばミッシェルさん。あの人達はまだ来てないんですか？」

リナの言葉にミッシェルは首を振った。

「ああ、まだ時間がかかるって聞いたよ」

「そうですか……」

そんな二人にセレスが尋ねる。

「あの、竜胆さん。あの人達って…」

「先生達の他に、今回の件で協力してくれる強力な助っ人です。ただここに来られるのに時間がかかるみたいで…」

「そうですか…」

「さて、会話も一区切りついたところで、今回の件について説明してもいいかね？」

ミッシェルの言葉に、セレス達はそちらのほうに向く。

「今回の件…、薙原ユウキ君の事で説明するよ」
「……」

ミッシェルの言葉に、場は静かになる。

「二年前に彼は、このギルドにリナ君とフィル君を連れて、三人で入ってきた。三人ともよく働いてくれたけど、特に薙原君は群を抜いて凄かったよ。次々と仕事をこなしていつて、難しい事も引き受けては達成させていつて、三ヶ月も経たないうちにBクラスをもらったよ。過去に何人も冒険者がいたけど、新米でここまでできる者はいなかった程だ。それから一年くらいだ。遂には別のギルドから依頼を頼まれる程になってね。新しく入った冒険者の指導を頼まれたんだ。彼はそれを引き受けて、このギルドを去っていったよ」
「そうですか…、薙原くんは立派にやっていたんですね…」

ミッシェルの話を聞き、セレスはユウキが大きく成長していつてる事を強く感じた。

だからこそ、セレスはこの先の内容を聞くのが辛かった。

「そして事件が起こったのは、今から一ヶ月前だ・・・」
「……」

セレスにとって聞くのが辛い内容である。
だが、それでも聞かなければならなかった。

「このコルウエイドにある一つの村が、突如襲撃を受けた。かなりの大規模で、生き残ったのはごく僅かの村人達だけだった…。生き残った村人達の話では、見知らぬ少年が大量の戦闘型ランサーを連れて襲い掛かって来たらしい…。そして、生き残った村人達の前でその少年は名乗ったんだ…。薙原ユウキと…」
「そんな…」

話を聞いたセレスは悲しい顔をした。
他のみんなも辛そうな表情であった。

「その事件に警察が動いて…、生き残った村人から話を聞いて、村を襲撃したと思われる少年の特徴が…、薙原くんと同じだったんだ…。そして警察は、薙原くんを指名手配した…。これが、今回の事件についてだ…」

話を聞き終え、セレスはミッシェルに尋ねる。

「それで…、薙原くんは今どうしているのでしょうか…」
「それはわからない…。捕まったという話は聞いてないから、何処かに逃げているんだろうが…」

せめて、何処でどうしているのか。
今のセレス達はそれも知る事ができなかった。

「けれど、いきなり指名手配だなんて、警察も短慮じゃないかしら。話を聞いただけで、その少年が薙原くんとは限らないんだし……」

「そうね。第一、自ら名を名乗る襲撃犯が何処にいるっていうのよ」

シルビアとぼたんがそれぞれ不平を述べた。

「ええ。だから、みんなに協力を呼びかけたの。このままじゃ、ユウキが本当に犯人にされて捕まってしまうわ……」

「そうだよ！警察なんかには任せられない！だから、ボク達でユウキを助けるんだ！」

リナもフィルも、自分達で何とかしないとイケないと強く思った。

「……そうですね。私達で、薙原くんを助けないと……！」

自分の教え子達の強い言葉に、セレスも心を強く、ユウキを助けることと決意する。

「私も微力ながら力を貸すよ。もちろん、ここでの仕事もやってもらうけどね」

「はい、分かっています」

ミッシェルの言葉にセレスはそう返事した。

「そういえば竜胆さん。あの人にも言っておいた方がいいんじゃないの？」

「あ、そうですね」

「え？竜胆さん、あの人って……？」

ミッシェルとリナの言葉に、セレスは首を傾げながらそう尋ねた。

「これからその人の所に連れて行きますので。それではミッシェルさん、私達は行きますので」

「ああ、行っておいで」

「それでは、ついて来てください」

「あ、はい…」

リナについていき、セレス達はギルドを出る。

「…強い子達だね。ああいう子達にあそこまで想われて…、薙原くんも幸せ者だね…」

辛い立場に立たされていながらも、ユウキは幸せ者だと、ミッシェルはリナやセレス達を見てそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6691x/>

ぱすてるチャイムContinue After Story

2011年11月11日06時30分発行